

せん ちひろ かみかく 「千と千尋の神隠し」と上尾橋高校



今年世界で初めて、スタジオジブリの映画「千と千尋の神隠し」が舞台になりました。映画を見たことがない人もいるかもしれないので、だいたいの話を紹介します。

「主人公の千尋(10歳の女の子)は、引っ越しの途中に、両親と不思議な世界に迷い込みます。すると両親がブタにされてしまい、千尋も元の世界に戻れなくなって困っていたところを、ハクという男の子に助けられます。ハクに言われて千尋は「油屋(今でいうスーパー銭湯のようなところ)」で働くために、魔女の湯婆婆に「ここで働かせてください」と頼みます。湯婆婆は「お前なんかにはできない。お前になんか無理だ。帰れ」と言いますが、千尋はあきらめずにお願いで油屋で働くこととなります。この世界では、千尋の味方だというハク以外には知る人もなく、むしろ人間ということで嫌われていた千尋でしたが、一生懸命働く中で、釜ジイというおじいさんや、リンというお姉さんが助けてくれるようになりました。また、みんなが嫌っていた腐れ神を助けたり、だれからも無視されていたカオナシに声をかけ、居場所を見つけてあげたりすることで、最後には油屋のみんなが味方となって応援してくれるようになり、無事にお父さんとお母さんを助け出して元の世界に帰ることができました。」

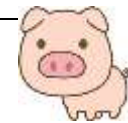
千尋は、転校して新しい学校に行くのを嫌がり、前の学校が良かったと文句ばかり言っていて、すぐに不安になったり怖くなったりして、言いたいことははっきり言えず、あいさつもお礼も言えない子でした。そのため不思議な世界に迷い込んでからは、リンに「あいさつもできないのか!」と怒られたり、ぞうきを固く絞れず、床のぞうきがけも他の人のようにうまくできないので、あきれられてしまいます。でも一つ一つの仕事を一生懸命頑張る中で、最初は千尋をバカにしていた湯婆婆にも「千を見習いな!」と言われるほど、努力を認められるようになります。最初はあいさつもできなかった千尋でしたが、最後に油屋の仲間と別れる時には「お世話になりました! ありがとう! さようなら!」と笑顔で言えるように成長していました…。

この千尋の映画を改めて見てみると、「千と千尋の神隠し」の物語と上尾橋高校での3年間はとても似ているなと思いました。今、千尋のように不安な気持ちを抱えている人はいませんか? すぐに不安になり、あいさつをするのも苦手。友だちもなく、周りがみんな自分を嫌っているような気がして、一人ぼっちで上尾橋高校の教室にいるような気持ちの人はいないでしょうか。

千尋もコミュニケーションは得意ではありませんでした。話がうまいわけでもなく、不器用で、人が驚くような特技もありませんでした。それなのに、敵ばかりだった油屋の中で、みんなに応援されるような存在になれたのはなぜでしょうか。



1つ目の理由は、下手でも不器用でも、人が嫌がるようなことでも、自分がやるべき仕事を一生懸命がんばったことです。油屋では汚いお風呂を掃除したり、汚れたお客さんを洗うのが仕事でしたが、この上尾橋高校での「仕事」は勉強です。みんなの中には勉強が得意ではない人、自分でもどうせダメだと思っている人がいるかもしれません。でも千尋のように不器用でも失敗しても、目の前の勉強や課題から逃げずにコツコツとやること、面倒くさい、嫌だなど思っても



遅刻しないで毎日学校に来ることで、あなたの努力を見てくれる人は必ずいます。

2つ目は、あいさつができるようになったことです。湯婆婆や釜ジイ、リンのように自分の目上の人だけではなく、スワタリという小さな真っ黒い生き物にも、「ありがとう!」とお礼を言ったり、ハクが盗んだ印鑑を銭婆に返しに行った時には、自分の失敗ではないことを代わりに謝ったりできるようになりました。おもしろいことは言えなくても、「おはよう」「さようなら」「またね」「ありがとう」と笑顔で言えたら、心から「ごめんなさい」と言えたら、そこから人とのつながりは始まるのです。

3つめは、それはなによりも千尋が持っていたやさしさと気づきです。

千尋はたぶんクラスでも目立たない存在だったと思いますが、大きな石炭で押しつぶされていたスワタリに気がついて助けたり、みんなから無視されていたカオナシに気がついてやさしく声をかけたりしただけではなく、カオナシが大暴れしてみんなに迷惑をかけたあとも見捨てませんでした。

みんなが嫌っていた臭くて汚い腐れ神からも逃げ出さず、その体にささっているとげに気がつき、それを抜いてあげることで腐れ神を助けてあげることができました。千尋のやさしさと気づきは目立つものではありませんでしたが、最後は死にそうになっていたハクを助ける勇気へと変わりました。



上尾橋高校では、「千と千尋の神隠し」の物語にあるような大きな事件は起きませんが、毎日の学校生活の中のあなたのさりげないあたたかい言葉や気づきが、誰かを助けたり、クラスのふんい気を変えていくかもしれません。

今年の卒業生たちも、3年間いろいろなことがあったと思います。新型コロナウイルスの関係で文化祭や修学旅行が中止になったり、仲が良かった友だちが学校からいなくなったりして心が折れそうになったこともあったでしょう。勉強が苦手な、投げ出したくなったこともあったでしょう。そんなとき、湯婆婆が最初に千尋にかけた言葉のように「どうせできない。どうせ無理だ。やめてしまえ」という自分の心の声が聞こえてきたかもしれません。でも卒業生たちは「ここで働かせてください」の代わりに「ここを卒業したい」「ここでがんばりたい」と自分に言い聞かせながらがんばりました。

また本人のがんばりだけではなく、ここ上尾橋高校にはハクやリン、釜ジイや銭婆のように、あなたの味方、あなたを助けてくれる先生や仲間がいます。だから、つらいとき、苦しい時どうしていいかわからないときはぜひ、先生や友だち、おうちの人に SOS を出してみてください。そして本当に苦しい時には、思い切って泣いてみましょう。「元気が出るおまじない」をかけたおにぎりを食べた千尋は声をあげて泣いて、元気になりました。

もちろん人前で泣いてしまうと周りの人がびっくりしてしまうので、泣きたいくらいつらい時はぜひ保健室に来てください。白いおにぎりの代わりに、白いティッシュペーパーを用意して、あなたを待っています。

